

*

それでは、大倭国（九州中央部、白川北岸）

から宇佐国へお遷りになった天照大神は

および豊受神は（梯嶋）は、

どうしたわけで伊勢国へ降ってゆかれるこ

とになったのだろうか。

なるほど、明記した書物があるわけではな

く、想像の域を出るものではないが、この物語

では次のように考えてみたい。（以下、第4巻参照）

元明天皇の和銅三年（七一〇）、藤原京が

ら平城の地へ都を遷すに当り、

その昔の神功皇后（天照大神）の御代の

遷都の儀式を再現したい

宇佐国に祀られておいでになる天照大神（神

功皇后）を、礼を尽し御招聘したように起

像される。手厚い

宇佐国を後にして、

と企図されたのではなからうか

そこで、

ちんぎ 鎮座

3,334^P-2/6

ちんぎ 鎮座

3332^P-4/6 1957
3363^P-4/6 観文

ほうびつ 2023⁰
彷彿とせし

幸さいなれた天照大神の御霊は、かつての神功皇
后の御代の日遷都せんのの様子を彷彿とさせる
へ南みなみの都みやこ（藤原京）から北きたの都みやこ（平城京）
へ移うつって行く華やかな遷都の儀式
の後の宇佐国へ帰るのてな
理的にいつて宇佐国に相当する伊勢国へ
降くだって行かれ日内宮ないくうに御鎮座された
のであろう。現在の
つまり、
へ宇佐国を後にして天照大神は、七一〇
伊勢国の
年頃日内宮ないくうに遷座された
と拝察される。
なお、雄略天皇二十二年（四七八）から後
へ日内宮ないくうの近くには、常に、豊受大神を
祭神とする日外宮げいぐうがあつた
項参照
この時（七一〇頃）以降
だが、宇佐国には、豊受大神を祀る日外
宮みやが取り残されていった
伊勢国日内宮ないくうの
天照大神は

宇佐国 離れはなれになつてしまつて、
寂しくお思ひになり、
「豊受大神を、日内宮に近くへお招きし
たい」と切望された。に違ひない。
■それにしても、――伊勢国へ日内宮が
移される以前、すでにその近傍には、天照大
神の分身と云うべき日八咫鏡を祭る日外
宮（離宮）が置かれていた。と考えられる
■先に述べたとおり、続日本紀、文武二年
（六九八）十二月二十九日条に、
「多氣大神宮を度会郡に遷す」とある。
■すなわち、日内宮が宇佐国から伊勢国
へ遷された奈良時代当初のころ、南伊勢の
地には、
①天照大神の宮である日内宮と、
②天照大神の離宮である日外宮と、
の二つの宮が、ほぼ相接していたように想
される。

日外宮の夫君と遠く

みたまに 皇 3411 P
 御代 219 皇 3410 P
 イザノ神宮 214 3,334 P-4/6

聖武天皇 皇 3384 P-4 奇妙 皇 3332 P-4
 皇 3404 P

とはいえ、よく考えてみれば、

へ天照大神の宮内宮のすぐ近くに、
 天照大神の宮外宮（離宮）がある。

というのは、少しばかり変である。

後代の学者達は、きつと不審に思う。

そこで、雄略天皇曰武に相当する「聖

武天皇の御代のことであったろうか（第一表

参照）

(1) この時まで曰外宮（離宮）の祭神とさ

てきた天照大神曰八咫鏡は、
 へ遷され、曰内宮の天照大神の御霊代

（神霊に代えて祭るもの、御神体）とされ

た。

(2) そして、これまで曰外宮（離宮）と称され

てきた神殿に、豊受大神（梯儻）をお迎えした。

その神殿は、曰外宮と呼ばれることにな

った。

(3) こうして、天照大神の宮内宮のすぐ近
 傍の曰外宮に、
 いて、
 夫君である豊受大神

いそのみわ
石鏡宮 ③3332-3/6 21行 (消れた)

3,334^P-5/6

字件
こと

(梯儔) が鎮祭さめたと推察される。

そのはそうと重仁紀二十五年三月条に

大神の教の随々其の祠を伊勢国に立て

たまふ。因りて斎宮を五十鈴の川上に興つ。

是を磯宮と謂ふ。則ち天照大神の始めて天よ

り降ります處なり

と記されていゝる。

あるいは

(1) 重仁天皇に相当する欽明天皇の御世に北

伊勢および南伊勢山中へ外宮(離宮)

を遷した(こと)と

(2) 平城遷都(七一年)当時、五十鈴の川上

へ内宮を遷した(こと)と

意圖して混在させていゝるのではなからうか

とも思ひ定かた

・なお一説に下イソは「イセの古名かという

(「日本書紀」(上)日本古典文学大系「岩波書

店」二七〇頁、注九参照)

*

ト
へ梯(はし)が祭(まつり)られることになった。
と推察(おしあ)される。

■では、前置きはこのくらいにして、
文献(ぶんげん)などを参考に「なから歴史(れきし)書(し)から削除(さくじょ)さ
れたと思(おも)われる空白(くうはく)の部分(ぶぶん)を、想像(そうぞう)図(ず)たく
ましくして書き埋(うめ)めて、~~ゆき~~とにしたり。

■先(せん)いざ出陣(しゅつじん)の
正月(しょうげつ)、新羅(しんら)が任那(みまな)の官家(くわんけ)を打ち滅ぼしてしま
欽明(きんめい)二十三年(ごふそくごに)

紀下
11.9.3付

中国 (ヤ) 上F85
3335-1/2

3,335P-1/2

12下120P
宇下42P
井上下84P

12下119P
3330-1/2

つた。
任那の官家を新羅が奪い取ったということ
は、我が国にとって、非常に大きな衝撃だ
つた。
欽明二十三年（五六二）六月、欽明天皇は
詔してこう言われた。（紀）
「新羅は、天に逆らい、無道である。我が
恩義に背いて、我が官家を破り、我が人民を
傷つけ、我が郡縣を誅し残った。
かつて、我が気長足姫尊（神功皇后）は、
霊聖に聴く明にして、天下を周行かれ、
人民をいたわりよく養われた。新羅が窮つて
頼ってきたのを哀れになり、新羅王の斬られ
ようと、いたその首を救い、新羅に要害の
地を授け、新羅を並み外れて栄えるようにひ
きたてられた。我が気長足姫尊（神功皇后）
が、新羅を軽んじられたことがあつたらうか。
また、我が国民も、新羅に別段怨みがあるわけ
ではない。
しかるに新羅は、長戦・強弩（機械仕掛け

$$3.335^P - \frac{3}{2}$$

言語道断 845⁺
仕打 939²
面告い 1875²

の大弓でもって任那を侵略し、大きな牙。
 曲った爪で人民を殺害した。さらに又、言語
 道断の数多くの仕打をして、其の醜さを何とも
 思っていない。
 我が国中の王臣たるもの、人の食を食ひ、
 人の水を飲みながら、こうしたことをも水聞
 いて、悼む心をおこさない者があろうか。
 まーや、朕は、前朝の勢威を受け、それ
 を後代へ伝えるべき地位のある身である。
 胆や腸を抜きたたらせるような気持で真
 心を貫き、あいつにも悪逆の者を殺し、
 天地の痛醜を雪め、君父の仇讎に報いなかっ
 たら、――死んでからも子としての道の成
 らなかったことを恨むことになるうら
 と仰せられた。悔やむだ

みたま 2行2119P
下 紀下66P
③3368P-1/2

3336P

20
紀下120P 2行10行
延請

ねかつ 元
額 漸く 1714P
台地 1342P

欽明天皇と聖塩媛との間に生まれた皇女。

ここに欽明天皇は、大倭国（九州）の中央に
位置する白川北岸の台地上に燦然と輝き渡る
天照大神（神功皇后）の宮へ赴かれ、氣長足
姫尊の霊前に額衝き、任那が滅ぼされてしまっ
た顛末をお語りになったのではなからうか。
・そして、かつての二度にわたる戦勝の時と
同様、日いま一度の御出御を懇願されたよ
うに拝察される。
「私の代に任那を失うことになりました。
非常に申し訳なく思っております。私は、
今すぐにも任那を奪還致したいのでござい
ますが、微力な私の力だけで一体何程のこと
か出東ましようか。このとおり、伏してお願
い申し上げます。天照大神のお力添えを賜わ
りたく存じます。何卒、もう一度、天の下を周
行り下さって、任那をお守り下さい。また、
皇女という用明天皇の妹（いにしへの神
功皇后の御霊は、天上の国の御殿を後にされたの
だろうと）と想像される。欽明天皇（五十九歳）

紀下66P

コフコ 1-20 20X20

③3358P

同様の
の巻

紀下120P 3行

411

カ 3332-1/6
5行 7モビ

さいいん
斎院

カ 3337-1/3
5行 7モビ

カ 3369-1/29
5行 7モビ

遷宮 元 1261 斎宮 = 斎王 元 129
紀下544 25 紀下66

・なお、欽明紀二年三月余には、
磐隈皇女、更名夢皇女、初侍祀於伊勢大

神。

云々

磐隈皇女、更の名は夢皇女、初めて伊勢

大神に侍^{まつ}祀^{まつ}る

とある。

恐らく、磐隈皇女こそ、伊邪国（宇佐国）

へ御遷宮された天照大神に、初めて侍^{まつ}祀^{まつ}られた斎宮^{いづきのみや}なのであろう、と思われ。

（斎王）

（「日本書紀」(F) 日本古典文学大系、岩

波書店、五四四頁、補注一七一五参照

後述

なお「これ以後」はなはた煩雑極まりないの

で「第424回」へ磐隈皇女の周行天下（想像図）

および「第423回」へ倭姫命の周行天下（想像図）

を参照下さい。

木

重要です。

- ・右頁全面に、はみ出し大きく掲載下さい。
- ・破線(7人せん)を太くしておいて下さい。
- ・文字は、全てゴシック体。
- ・トレスして下さい。

地名辞 706 坂田郡

1136 長浜

⑤ 5756 1/2 沖ノ島周辺の地図
沖ノ島 毎町村に大壁 164 戸あり。

⑤ 5763 1/2 奥津島神社

3,337 1/2

沖ノ島の5重
オ23 冊目(新刊)
米原 ⑤ 3374 1/2

地上591m
地名辞 104 1/2



「大山城」日本の瀬沼と送谷
99 写真

いまわたり
今渡市 3,376
- 8/8

⑤ 3377 3/5 1/5

たど
北伊勢大神宮

地上 269 頁, 591

倭姫命 世紀 51 頁

⑤ 3374 1/8 へ

中心ふりわけ
140G

第 423 回 倭姫命の周行天下(想像図)

⑤ 3371 1/11 行

413

⑤ 3,332 1/2

外宮の交通の厂々

⑤ 5266 1/3 6 分

重要です。

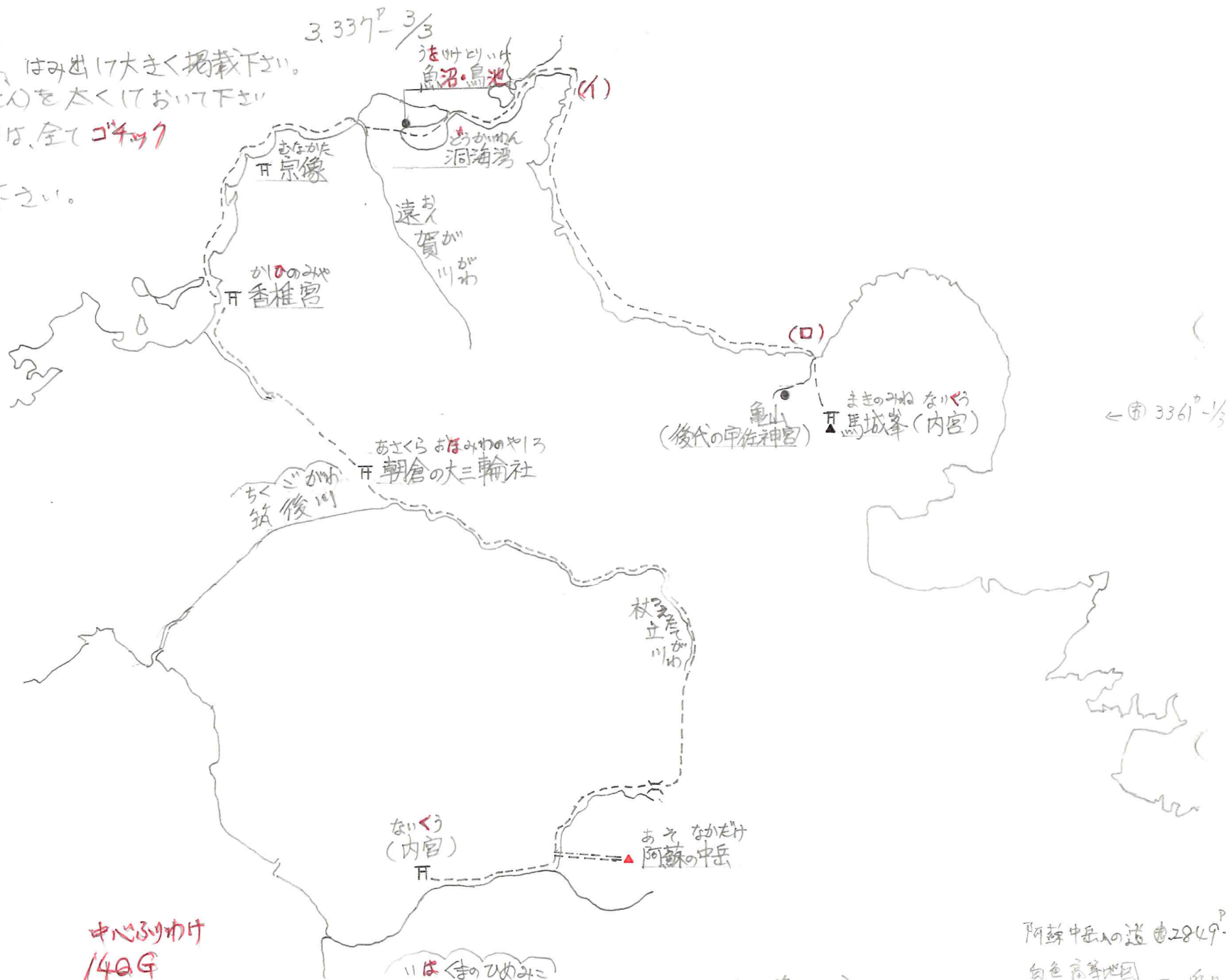
- ・左頁全面に はみ出し大きく掲載下さい。
- ・破線(ひせん)を太くしておいて下さい

④ 3358^p } ・文字は、全て **ゴシック**

・トレースして下さい。

④ 3341^p-1/2 17行→

④ 3341^p-1/2 16行→



第424図

いはくすのひめみこ

磐隈皇女の周行天下 (想像図)

④ 3358^p 10行 414

④ 3358^p 10行 414

阿蘇中岳への道 2849-9/5

白色 高野山
①九州北部地図に近

→ 562, 6/30 ⑤

66

5830.5
重複 741458^P

たけいはたつのみこと *

(1) 神武天皇

後期継体天皇

耳
命
の
子

として生まれた

健船龍命

は

蘇すの宮みや北きた村むらに居ゐ住すした。

(2) 7 1 7 後

年々三代目の天皇

景行天皇に

相当

す
る
し

敏達天皇
かみ

健康龍命

と、
阿蘇

の草部 吉見命

女の間に生れを連

瓶王命の子惟人に命じ

宮地村に
阿蘇神

阿蘇神社を建てさせ給うた

[illegible]

のてあうとと想察と小る。
(第六十五) 章八健

盤龍命 ✓ の 項 におい 下 既述

とすは

あ	い	う	え	お	か	き	く	け	こ	さ	し	す	せ	そ	た	ち	つ	て	と	な	に	ぬ	ね	の	は	ひ	ふ	へ	ほ	ま	み	む	め	も	や	ゆ	よ	ら	り	る	れ	ろ	わ	を	ん
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

人天照大神を奉戴し
つつ阿蘇へおいでにな

左磐隈皇女の一行の御到着を、健磐龍命は

あ
きりて
③ 334
④ 94
た
あ
二
次
一
行
に
御

いちぞくろうとう
一族郎党ともども

電
あけ
「国を挙げて」

H30(2018)8.26(日)~8.28(4回)
 H31(2019)3.18(月)~3.19(3回)
 令和元(2019)8.21(水)~8.22(3回)

3,338^p-3/3

「おでまふ」前10行

F^{8/22}
 8/20

米

(阿蘇神社)

心から御^ミ歡待^{かんたい}した^{トル}族^ミをあげておつくりな
 のであらう✓
 と思われ。 ^{うるめ}
 そで、その震^{ふる}しい^{せい}誠^じ実^{じつ}さをめでて、
 へ^み敏^み達^{だつ}天皇^{てんかう}は、^{たけいはたつのみこと}健甕^{けんそう}龍命^{りゆうめい}の^{まこと}孫^{まご}惟^い人^{じん}に命^{めい}じ
 宮^{みや}地^ち村^{むら}に^{あそ}阿蘇^{あそ}神^{じん}宮^{みや}を^た建^たて^たせ^た給^{たま}う^たと
 と想像^{さうぞう}される。

ひぐん 2147^P みまろ 2107^P 3.339^P
夢幻 夢と相対

ひぐん 1859^P
微塵 一を帯びる

刀・矛と奉る 927^P 1/2³ 奉る

ほうす 奉る おいただ 奉る

ほうたい 奉る 3338^P 177 1959

『戦勝祈願』

天照大神（神功皇后）の御霊を奉いながら

外輪山の内奥へ入った磐隈皇女は、天照

大神へ神功皇后磐隈皇女は、阿蘇の中岳の噴

火口目指して登って行かれた。山上神社

噴火の間近には、神功皇后ゆかりのあの社があった。

磐隈皇女は、神山の神阿蘇の神大物主神

に刀と矛とを奉り、御酒をすすめて、戦勝を祈

願された。わすかな供の者達もまた、皆、う

ち揃って神の前に額衝き、一心に祈りをささ

げ、拍手を打った。の耳に

この祈りは、大物主神聞えたことであらう。

しかし、あるいは微塵を帯びて赤ら顔とな

った神は、心地よい夢幻の世界をさまよって

おいでだったのかも知れない。

ともあれ、御神火の山は、――後やかな

安らぎの表情をみせていた。

風は凪ぎ、もくもくと沸き上る黒い煙りは、

真直ぐ大空へ立ち昇っていた。

「よし、というに違いない。」

三三五五 919^p 建勝寺の古書 十余丈 紀下388^p
 紀上335^p 末だ一冊... ⑤ 3295^p 十余丈の古書があったのだらう。

阿蘇谷の東の奥へと進んでいった。

夫に向い、ゆらゆらと立ち昇っていった。

とその頃から、
 どの頃からと
 いうこと
 もなく
 軍衆が、
 三三五五、
 自づからに
 聚ま

く 軍勢が集ま へてく の た った

頼もしくも兵士達は、
神功皇后の御霊と共に
出陣するのだから
必ず、新羅を平らげる
ことが出来るだろう

と
言
っ
た
。
討
ち
任
那
を
ば
奪
回
し
よう
ぞ
。
我
ら
の
軍
に
は
、
神
功
皇
后
が
お
り
す
ぞ
。
我
ら
の

士気は高まつていつた。
 船隈皇女は、
 軍士を整理えりと、凛凛し

小版底 3340 紀上 334
 橋本 紀上 334
 大三輪社 紀上 335
 3338 1/3 10行

3.341^P - 1/2

到着 3338
 紀本果 地回 東北

引き続き
 928^P - 3/5 10行
 東の端 5627.1(水) 3338^P
 20頁 17行 奉戴 3338^P - 3/5 19行

天照大神を奉戴して陣頭にお立ちになった。
 阿蘇谷の東の奥の突当りから、ほぼ垂直にそそり立つ外輪
 山東端の断崖絶壁を登ってゆき、頂上に到達した磐隈皇女の兵衛は、
 外輪山から北の方へと、引き続きなだらかな坂
 道を、うねうねと曲り連なり、降っていった。
 杖立川は、玖珠川を合せて、筑後川となる。
 この川に沿う山道を降ってゆくと、闇もな
 く、筑後平野へ出る。 どんどん
 木なお、山中のこの山道に、ついては、後年(六
 七二)の壬申乱の、初期の段階において、
 もう一度述べるとなる。

木

磐隈皇女の陣は、朝倉の大三輪社に立ち寄
 った後、博多湾の東端の香椎宮へと到った。
 験ある証を得られたというあの櫃日浦は、も
 うすでに、無数の船で埋めつくされていた。

御
 奥の突当りから、

紀上 334^P 9行
 紀上 334^P 9行

令和2(2020)4.3(金)～4.5(4回)

とろ(ル
聞夫-1568P
紀上334未2行

3.341-2/2

フは和
兵甲
紀上334紀上338未5行
未2行

しほにきえ
直々
必す334015行

きんに
金鼓
600P
陣鉦と陣太鼓

4/5 1F 4/4
4/4

✱

せ
て
い
た。

兵甲共は、武者ぶるいし、聞志を燃やしたで

降い服うであうう

長足姫尊と共に戦うならば、今回もまた新羅は

天照大神と仰ぐ我等が氣

ではないか

これまでの数々の屈辱、今こそ晴らそう

神功皇后が、自らお出ましになつた

加風にはためいた。

金鼓の音が凄じいはかりに鳴り響き、旌旗

旗、幟

旗、幟

$$L = 30 + 2 \left(\frac{1}{4} \right) 3345 - \frac{2}{3} \text{ 斤}$$

みまな_よた_かい

7
11
7
0

紀二十三年（五六二）六月、是の月条参照

「恐れながら申し上げます。皇后の鞍（神功皇后の天

御座所を示唆してゐるのであうにに異なるこ

と
か
あ
り
ま
し
た
。
急
に
し
て
殿
に
災
が
あ
り
、
火

の
廻りが
あまり
にも
早く
て、
どう
し
よう
も

ありませんでした

使者は、さらにこう言つた。

先に、ある者が馬飼首歌依を讒言して、

口歌依の妻逢臣讀岐の鞍の韉(鞍)の下にか

ける覆い
は
どうも
おか
い
う
う
う
見る

きゆうもん 元582
糾問
糾問

紀上
64 105

3,342^P - 3/2

こと

石姫

おひめ
おひめよそひ

と、皇后の御鞍だり

と、いったので、歌依を捕えて延尉(刑罰担当

の官人)に送り、きびしく糾問いたしました

すると、馬飼首歌依は、揚言して(言い立

てて)

口それは虚だ。真実ではない。もし是か真

実ならば、私は必ず天災を被るのだら

うら

と誓い、とうとう拷問にあつて地に倒れ伏し

死んでしまいました。

すると、いくばくもなく、急にいて殿に災

が起ったのでした

と申し上げた。

馬飼首歌依が、

もし是れが真実ならば、私は必ず天災を

被るのだらう

と言わないうで、幾分省略し、

もし是れが真実ならば、必ず天災を

被るのだらう

と言ったものだから、歌依の死後いくばくも

天災
紀上 335
紀下 121
宇治巻 43

こと
3.343^P

紀下 121
335

なく、急に―て殿に災が起った、という意味
なのであらうと思われ。

＊

人々は、

神功皇后の大殿に災があつた

というその悲報に驚き、
懔懔としてさへや
き合つた。

紀下 121
235

こんなにも大切な時を前に―て、天災が

下されたというのか

何ということだ

このまま進めば、きっと、さらに恐ろし
い事態に立ち至るだらう

兵甲共の戦意は、急速に萎えていった。

そして、今はもう、

海を渡って、新羅を討伐しよう

な、と言う者など、誰一人としていなかった

＊

第 6 卷 第 1 期 1981 年 6 月 (二)

		(4) $\frac{1}{2}$ $-\frac{1}{2}$ LA
		

鎮定 562年7月 和平(2件) 奉

ル	ル	ル	ル
---	---	---	---

1 → _____

そ	に		
---	---	--	--

3,344^P

[illegible]

~~減時: 10分~~

				
---	---	---	---	---

紀F122'657

月め

24

425

[illegible]

20

コクヨ ケー20 20×2

「という」→ 2度ある。 紀下122 1054
 このとき 次々 1054
 3,345P-1/2
 5つたいを こと
 撤退 1529
 大軍 1331
 紀下122 8行～
 注意を払う 1822
 義取る 541
 何をわね 1664
 なひ せ
 罪か 1666
 旌旗 1217

鮮半島南西部地方に留^{とど}ま^まった大將軍紀男麻呂宿禰と、副将河内臣瓊岳とき、任那へ急行^{きんこう}させ^させ^せた。ついで^{ついで}厳^{きん}しく^く新羅^{しんろ}が任那を攻めた行為に^{こうゐ}問責^{もんせき}させよう^{よう}とい^いうのである。責任^{せきにん}を問^とうこと^{こと}と^というのであ^ある。早く、任那から撤退^{てつたい}する^{する}かよい。さもな^なければ、倭軍^{わぐん}がすぐにも大挙^{たいきょ}して攻め寄せ^よせてくる^{くる}ぞと脅^{おど}し、あ^あゆよく^{よく}は、刃^はに血^ち塗^ぬら^らす^すて、任那を返^{へん}還^{えん}させよう^{よう}という魂胆^{こんたん}で^であ^あつた。またこの際^{さい}、新羅を威^い圧^{あつ}する^{する}のに^に百濟の力をも借^かりよう^{よう}、^{さくせん}という作戦^{さくせん}が採^{さい}取^とられた^たで、^{こもつあべのちびと}薦^{せん}集^{しゅう}部^ぶ首^{しゅ}登^{とう}弭^み、^{さくせん}という着^{ちやく}を^を百濟へ^へ遣^{てん}わした^たで、^{こもつあべのちびと}軍^{ぐん}の計^{けい}を約^{やく}束^{そく}させよう^{よう}、^{さくせん}とい^いう

ふくや
服部 1928

おみ
使王
井上 88° 日本紀 3,345-2
紀下 124° 2,72°

下 44° 28°
同 土 11° 10°
新 羅 事 記 364°

下 122°
井上 86° 宇治 43°

セウガ
由 3342
1/2 K7
かし
この
1759

と ころ か、その 計略は、意外な不注意から発
覚した。 登壇が、妻の家へ泊途中、
封印した機密の書信と弓箭とを落して、
新羅は、倭国の軍の計をつぶさに知って、
まった。 新羅は、降伏をよそおって反撃に出た。
ここに新羅は、何も知らずに、策を
めぐらし、降伏をよそおって反撃に出た。
このとき補虜になつた調吉士伊企難（百濟
からの帰化氏族）新撰姓氏録によると、百濟国努理
使主の後という箕子の子孫かは、勇猛な性格で服従しよ
うとしなかつた。（第二章へ難波吉士と健吉士の項参照）
新羅の闘争は、さつと刀を抜くや、斬る身構えを示し
たりや、禪を脱かせ、尻を日本に向けさせて、
と大声で号叫はせようとした。 日本のか、伊企難は、
と号叫び、いくら責めさいなましても止めず
ついに殺された。

*

「こつて」次頁行

3,346^P

あいた
目と鼻の間
(目と鼻のえ)

玄海藏

74

とは、
対？
にな
て
い
た
い
6

あえていへは

犬の大王よ、云々

と言ふように命に水をたすのかとも知れない

イ
カ
ハ
イ
金
銀
は

が
と
し
て
拒
り

新羅の王よ、
水か尻を食らえ

均等

任
那奪還
の
一
の
望
み
さ
え
も
が
下
実
に
完
膚
な
き

ま
で
に
徹底的に
打ち砕^{くた}
か
水
て
し
ま
っ
た
い
ま

すまゝ
三
すまゝ
すまゝ

日補の疾に立つ欽明天皇は

方の一点をいって眺みつけるようにして、

視之水火。

玄海灘によつて隔てられてゐるとはいえ、

ついで目と鼻の先の近きにある財の国に任那に

を、自ら救いに
行けとさえ出
なかつた

と
か
、
口
惜
|
い
回

欽明天皇の心は重かつた。このまま悄悄と

歸京するのも情無く、胸かきむしらるるばかり

りに無念でならなかつた。

「再び新羅の治世下に置かれた」
 ではない。元は「長岡村」
 3335-200 = 3135
 562年 - 200 = 362年
 へたへた 隔てる 元 1993

前14行
隔た
て

均等

神经经济-99P
356P末

もつとも
おほい
鳥命
口
申
王
流

3348°-1/2 559

3,348°-2/2

3369°-3/3

3190° 同 3194° 359
3190° 3372° 3350°-1/8

一、延喜本系に鎌足の曾祖父常磐につ
いて始賜中臣連姓と記されてゐるので、
古来の中臣氏の嫡系は仏教受容に反対し
て滅び、常磐らが傍系から入って継いだ
とする説がある。第六十四章「宇佐津彦」の項において既述
と察するところ、神皇正統記に「皇極天皇
の種子命のすゑ大鹿嶋命祭官になりて
云々」という記事は誤りであつて、
中臣氏の傍系筋に当る「宇佐津彦のす
ゑ大鹿嶋命祭官になりて、云々」と記す
べきであつたと解される。

すなわち、天照大神が始めて伊勢国に相当する
宇佐国へ御遷座される時、中臣氏の傍系
筋に当る宇佐津彦のすゑ大鹿嶋命が天照大神
の祭官となり、大鹿嶋命以降、鎌足の
父御食子の時まであつと、その官「宇佐国の
内宮」(天照大神の宮)の祭官として

34/3P 1133P 3399P 3492P 3195P 319X 3345P 3350P 3194P 3350P
 34/3P 3194P 3350P 3350P 3350P 3350P 3350P 3350P 3350P 3350P
 34/3P 3194P 3350P 3350P 3350P 3350P 3350P 3350P 3350P 3350P

お仕えしていたし
 といふことであつたらうと推察される。

とすると、中臣氏の傍系筋である大鹿嶋命

の血筋（正系筋）は、大鹿嶋命、常磐、可多能

祐一、御食子（美気祐・彌氣）一鎌足

と続いて、いたように、~~更~~ゆる。

とところか、彌氣が舒明朝に中央へ出て仕える

（天照大神の宮）における祭官の職は、支系筋に

よって引き継がれたのかも知れない。（既述）

尚、舒明即位前に、中臣連彌氣とある。

木田神主の祖が天照大神を奉じて、宇佐国から伊勢国の

内宮（皇太神宮）ともいうへ降りていたのであろう。

皇太神宮儀式帳に、長に、

3350
 一系図
 3350
 -4/6
 8行
 3357

伊勢神宮、桜井勝え通 218

太いゴ4

神祇官 大鈴 神祇の官庁
3,350^P-1/6

中臣の本家筋 3348^{1/2} 125 あらきだ
伊勢神宮 218^P
其木田 3190^{1/2}

伊勢神宮 218^P
正系筋 3195^{1/2}

鎌足は、大臣でなく、大織冠、内大臣

と記されている。
① 大鹿嶋命は、
② 藤原鎌足の遠祖であり（「神皇正統記」
へ皇極天皇条参照）
③ 同時に、内宮（皇太神宮）の荒木田神主、および
宇佐氏の遠祖でもある、
という（こと）なのである。宇佐氏については、第六
十回章「宇佐津彦」の項において既述）
・ 鎌足は正系筋
・ 荒木田神主は支系筋
・ 後代の宇佐氏は、荒木田神主の傍系筋
に当るのであろうと想察される。
では、延喜七年（九〇七）に、
木田基貞以下十一人の氏人が連署して中央の
神祇官へ差出したといわれる系譜、皇大神宮
神宜譜図帳を見てもよい。
荒木田基貞の遠祖は国摩大鹿嶋命であると
い、第48表の系譜をかかざる。（「伊勢神宮」
桜井勝え通、学生社、二一八一二二頁参照）

大鹿嶋
431
無

延喜7年907
 舒明天629
 19)278
 14.6
 278

延喜元年 531
 24
 555
 3,350 - 3/6
 たり 1403 3350-1/6 1412

907 907 907-555
 -564 555 5 35239.652
 343 352 912年間

紀小末 「ニ」 3348 1/2

もしも
 大鹿嶋命が、日本書紀に記されて
 いるように、垂仁二十五年（紀元前五十年）頃
 の人だと仮定すると、延喜七年（九〇
 七）迄の九一二年間に二十三世代を数える二
 十になり、一世代当り約四十歳となる。
 一か、そのようは、なほ考えにくいよう
 に思われる。

一方、大鹿嶋命が、垂仁二十五年に相当す
 る
 欽明二十五年（五五五）頃の人だとすれ
 ば、延喜七年（九〇七）迄の三五二年間に二
 十三世代を数えるとなり、一世代当り約
 十五歳となる。（第1表参照）こんなことも
 言いうまでもなく有り得ないことであ
 る。兄弟相続などが、多々あるのだろうか。

（＊）
 ところでいま一度、大鹿嶋命以降の系図を見
 てみると、最初の七世がすべて何某ミコトと
 なつていて注目される。

ている

可能和 日本 745⁷
冠位 483⁹ (太 25 利道)
④ 3348² 2 行

$$\begin{array}{r} 3350^{\circ}-4/6 \quad 12\text{斤} \\ 7142 \quad 629 \\ \hline 6762 \\ 67 \\ \hline 679 = 167 \end{array}$$

- ・ 奥の上・下段にまたがって長く連らねて下さい。
- ・ できるだけ大きなゴチャにしてください。

3350^p - 5/6

大鹿島命・大狭山命・天見通命・天布由多岐命・大母貫連伊己呂比命
 (常盤) ← 通と常の高さを合わせる
 (可多能祐) ← 多と多の高さを合わせる
 (中臣連) ← 連と連の高さを合わせる
 伊己呂比命 ← 己(き)と氣(け)の高さを合わせる。

第1巻
 エへ移動。

1406
 第49表 天見通命以降の系譜と
 常磐以降の系譜対比表

